

2019年3月4日

朝礼の話 (2019年3月)

皆さんお早うございます。昨日が桃の節句、ひな祭り、明後日が二十四節気の啓蟄となります。啓蟄とは、冬ごもりしていた虫が、暖かくなり地中から這い出してくる様を言い、この季節を絶妙に言い表す言葉の一つです。来週には奈良東大寺二月堂のお水取り、再来週の21日が春分の日となります。一気に春がやって来ます。スギ花粉の大量発生で花粉症の方には大変つらい日が続きます。気候も寒暖の差が激しくなります。何時も以上に体調管理には気をつけてください。

先月起こった様々な出来事で一番印象に残ったことは、探査機「はやぶさ2」の小惑星「りゅうぐう」への着陸成功のニュースです。宇宙航空研究開発機構（JAXA）は、先月22日、2014年12月に打ち上げられたはやぶさ2が地球から3億メートル離れたりゅうぐうに午前7時29分着地したと発表しました。直径900メートルの小惑星の半径わずか3メートルのピンポイントへの着地に成功しました。地表の岩石を採取するための弾丸の発射も確認されました。小惑星の岩石には、46億年前に生まれた太陽系ができたばかりのころの状態が保たれていると考えられています。岩石の成分を分析できれば、地球の成り立ちや生命誕生の謎を探る大きな手がかりとなると期待されています。はやぶさ2は、りゅうぐうが太陽に近づいて熱くなる7月までにさらに1~2度着陸し地下に埋もれた物質の採取を試み、19年末にはりゅうぐうを離れ、20年末に地球に還ってくる計画であります。はやぶさ2は、「はやぶさ」の後継機です。初代はやぶさは、2003年5月に打ち上げられ、幾度のトラブルに見舞われながらも、小惑星「イトカワ」に着陸し、1500個の砂の粒、微粒子を採取して10年6月に地球に生還しました。当初4年かけて地球とイトカワを往復する計画でしたが、姿勢制御装置やエンジンの不具合などトラブルの連続で生還まで7年かかりました。その間、2ヶ月間地上との通信が途絶え、一時帰還が絶望視された時期もありました。奇跡的に地上からの制御を取り戻し地球に帰還しました。はやぶさ2は初号機のさまざまな問題、欠陥を改良し精度と信頼性を大きく向上させて開発、製造されました。大小300社近くの日本企業が開発、製造に参画し、技術を結集しました。地球帰還までの総事業費は289億円が見込まれています。米中などがかける惑星探査機の資金より一ケタ少ない水準といわれています。少ない予算の中でのはやぶさ計画の成功は日本の技術の高さを世界に示したといえます。初代はやぶさの帰還をきっかけに、JAXAは米航空宇宙局（NASA）と小惑星探査で連携しており、はやぶさ2の成功でNASAからノウハウ提供を求められるまでになっています。日本企業のものづくりの技術力の高さとそれを一つの目的に結実させる構想力、開発力、チームワーク力の成果が現れたといえます。このことは会社の経営にも通ずるといえます。それぞれの立場、役割分担に応じ、その職責を果たし、チームワークで会社全体の目標、課題を達成、克服していくことです。はやぶさ2がこのあとも計画通りの任務を遂行し、無事に地球に帰還することを祈りましょう。 以上